デキルことをデキル範囲で

忙しい家族の代わりに介護の手助けを

元看護師であり主婦であった菅原由美氏が、日本初の「全国訪問ボランティアナースの会」を一人で発足させたのは、自身の在宅看護の経験と、その行動力によるところが大きい。

「看護の知識と資格は結婚してからも、夫や子のために役立つ」と考え、反対する両親を説得して東海大学医療技術短期大学看護学科に進学。1976年に卒業後、同大学病院に一年間勤務し、結婚を機に退職した。しかし結婚後、看護師の資格が一番役立ったのは進学した際には想定していなかった介護だった。義祖母、義母、自身の父の介護を通して「わたしのすぐそばにいた人たちが、わたしに介護を教えてくれた」と言う。特に義母が大腸がんになった時、菅原氏が看護師の資格を持っていたことで義母の〝在宅看護〟が認められたことが、看護師による在宅看護ボランティアのアイディアを思いつくきっかけとなった。

菅原氏のアイディアは、1995年、阪神淡路大震災の医療ボランティアに参加し元看護師たちと活動することで、現実味を帯びていった。自身のような結婚や子育てのために看護師の仕事を辞めた「潜在ナース」を集めれば、地域や社会の役にたてるはずだという思いを強く抱いたのだ。

アイディアが具現化したのは1996年。知人の後押しもあり、ニュースリリースとして「介護に疲れた家族を休ませてあげたい」という、菅原氏自身の在宅看護ボランティアへの強い思いを託した「手紙」を、マスコミに配信した時であった。その手紙の反響を得て、地元新聞記者の協力でボランティア団体設立の説明会を1997年に開催。説明会に来た約30名の賛同者と共に、日本初の訪問ボランティアナース団体、キャンナスの活動を開始した。

キャンナスは「デキル(Can)ことをデキル範囲で行うナース(Nurse)」という名の通り、家事や育児に追われ「一度リタイアした看護師に、自分のデキル範囲でその経験や技術を活かす場を提供している。2000年に施行された介護保険制度では対応しきれない滞在型訪問介護サービスを提供することで、地域の人々のニーズに応えてきた。また、相互扶助の考えを信念とし有償ボランティアとすることで、サービスの提供方法を簡潔化。そのニーズに基づいた分かりやすい活動方針に多くの人々が賛同し、現在では全国85ヵ所以上で在宅看護・介護サービスを展開。東日本大震災の被災支援にあたっては、2015年8月末時点で派遣数がのべ19，000人にまで上っている。

日本が超高齢社会を迎え、介護保険制度が度々改正される中、制度や制約の狭間で苦労しながら積み上げた菅原氏の活動は、多くの人に必要とされることで広がり続けてきた。そして、今後そのニーズがさらに増すことは間違いない。

> 開業看護師を育てる会シンポジウムの様子

> 東日本大震災の被災地を訪問した菅原氏

すがはら　ゆみ
菅原 由美 Yumi Sugahara
特定非営利活動法人キャンナス 代表
Representative, Non-profit Organization CANNUS

推薦者　**木山 啓子**
特定非営利活動法人ジェン 理事・事務局長

1955年神奈川県生まれ。1976年東海大学医療技術短期大学看護学科卒業。東海大学医学部付属病院ICUに一年間勤務。その後、企業や保健・非常勤勤務をする傍ら3人の子どもを育てながら、親近者の在宅介護を経験。1995年阪神淡路大震災の医療ボランティアに参加後、1996年全国訪問ボランティアナースの会キャンナスを設立。1998年有限会社ナースケア設立。2009年「ナースオブザイヤー賞」、「インディペンデントナース賞」受賞。開業看護師を育てる会理事長、日本臨床医療福祉学会評議員、藤沢市介護保険事業所連絡会幹事・代表幹事・管理者部会長などを務める。著書に「いけいけ!ボランティアナース～在宅ケアの新しいかたち～」(アニカ)などがある。